

序

COVID-19 流行と内なる自然

形井秀一

社会鍼灸学研究会代表、つくば国際鍼灸研究所所長

スペイン風邪の流行は 1918 年から始まり世界を席卷したが、そのほぼ百年後の 2020 年の 1 月から、COVID-19 がパンデミックに流行し、世界中で、国家間の往来が制限される状況に至った。そして、第 2 波や第 3 波の到来で、12 月になっても、自国内での移動制限が行われるなど、生活に規制や自粛が求められる事態が多く多くの国々で続いている。

100 年前のスペイン風邪の流行は第一次世界大戦の最中で、戦場が世界中に拡大され、米軍を始め各国の兵士が、スペイン風邪の宿主となって、世界的感染拡大の主役を果たしたとされた。今回の COVID-19 流行は戦時下ではないが、世界を股にかけて経済活動を展開する兵士ならぬ企業戦士が感染拡大の一翼を担ったであろう。いや、それ以上に、短時間に、世界のあらゆる国や地域を往来できるようになり、実際に多くの人々が、世界中を行き来することを可能にした経済発展の結果が、感染拡大の大きな要因と考えられる。

世界中の観光地に繰り出した人々は、COVID-19 感染拡大の役割を担う先鋒となり、スペイン風邪時と同様、感染を運ぶ戦士となっていたとは思ってもよらなかったに違いない。COVID-19 は、陽性が顕性化する数日前から不顕性感染するのが特徴だと言われるが、多くの人々の移動を可能にした経済発展こそが、発生源の武漢や中国国内に止まらず、パンデミックな感染流行となった大きな要因であった。自分の楽しみのための小さな旅行であっても、「生産と消費」の拡大を目的とする資本主義社会においては、資本主義経済を支える大事な役割を担っている反面、社会のあり方に脅威を与える役回りとなることもあり得ると自覚することとなった。一国の経済は、一国のみで完結するものではなく、世界中の国々と不可分・密接な関係を持ちながら成り立っていること、人々の生活が経済と無関係ではあり得ないということ、を COVID-19 は私たちに改めて教えてくれたのだった。

人類は、数千年、いな数万年をかけて自分たちに都合の良い人間生活圏を作り上げてきたが、果たしてそれが正しかったのかと大いに反省させられる機会となったと言え、うがった考えであろうか。

その気づきは、自然破壊、環境問題、再生エネルギー問題等々、現在の世界が抱える地球規模の様々な問題は、実は、日常生活における一人一人の小さな消費や行動と無関係ではないと、誰もが思い至ることに繋がるであろうと、期待したい。

さて、鍼灸である。緊急事態宣言下の地方自治体（例えば、東京都）の措置では、鍼灸・マッサージは、「社会生活を維持するうえで必要な施設」とされる「医療施設」の一つであり、「適切な感染防止対策の協力を要請」されてはいるが、営業の自粛要請施設の「対象外」とされた。このことは、「国家資格有資格者が治療を行う」「医療施設」として、地方自治体で認知され、「必要な施設」と見なされたと言うことはできよう。だが、他の「医療施設」の病院・診療所・歯科・薬局とは、医療の視点や依って立つ基盤が異なっている。

鍼灸は、人間の治癒力が治療の中で果たす役割の比率が現代医学より高かった 2000 年以上前の時代に誕生した療法である。また鍼灸は、人間の治癒力を重視し、その治癒力を軸に体系化された医療、医学であり、治癒力を重視するという基本的な軸は現代まで引き継がれてきている。人間の中にある「自然治癒力」を見つめ続け、大事にしてきた医学である。

だが、現代の医療状況の中で、治癒力がどこまで大事にされているかは、心許ない。確かに、個の治癒力、免疫力が COVID-19 感染拡大の状況下で見直され、免疫力を上げる運動、食事、生活など推奨されはした。しかし、そのような付け焼き刃的な「免疫力」への見直しは、コロナ禍が過ぎると直に忘れ去られてしまうであろう。

この本質は、人間の中の自然がどこまで大事にされるか、ということである。人間を取り巻く自然環境のみならず、人間の内なる自然環境再生の視点が、さらに、重要になるであろうことを COVID-19 は教えてくれる。